

特定非営利活動法人 チェルノブイリへのかけはし



代表
野呂 美加 (写真中央)

北海道

チェルノブイリ原発事故の影響が残るベラルーシ共和国の子どもたちを北海道などに招き、健康回復と放射能を排出させるために保養させる活動を1992年から行い、648人を受け入れてきた。福島原発事故の発生により2012年からは同国へ向けた活動は休止し、福島県など約40人の子どもたちを受け入れる活動を行っている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

授賞式の日、賞状をいただいたとき、思わず涙が出てきました。あのような大舞台をご用意いただきましたが、自分たちの普段の活動からかけはなれた華やかさに圧倒されて現実感がありませんでした。

しかし、前日からさまざまな活動をされている団体のご苦勞をお聞きし、同じ思いをされている人たちがこんなにいらっしや、光をあてていただいたこと。そんな思いが重なり合って、賞状をいただいたときに、様々な思いが「わっ」とこみあげてきました。あのような壇上でおいおい泣くわけにもいかず、必死で我慢していましたが、会場にいたメンバーはさすがにめざとくみつけて、「泣いていたでしょ」と後でつかれました。実際、壇を降りたときは、号泣しそうでした。それは、普段意識をしないようにしていますが、やはり活動は「大変」なんだということ。そして、その一言を言ってしまえば、崩れてしまうものがあります。

自分たちの表現や活動が稚拙なために、救援活動が社会へ認知されないことへのもどかしさ、チェルノブイリの子どもたちに顔も浮かんできます。原発事故被災児童の救援、20年といってもまだまだ新しい救援活動の分野なのです。医療でもない、国際交流だけでもない、「社会貢献」ですと、認めてくださったことが、大きなエールでした。

では、次に私たちは何をしたらいいか？

やはり、私たちは被災された方がたや子どもたちに寄り添い続けたい。日本で起った福島原発事故も、チェルノブイリの時のように、被害を受けた方が社会からの無理解や差別されるなどの社会現象が起ってくると予測されます。

たとえば、「放射能恐怖症」と一言で片付けられる事象があります。その「恐怖」を一笑に付されたり否定されたり、理解されない環境が続けば、精神的病になり、身体症状にまで及んでしまうのです。つまり、人間であるからこそその苦悩が起って

きます。

子どもや家族の健康は大丈夫か…、あれだけの大きな地震、事故、職業や収入の変化、引っ越し、仮設住宅、子どもたちを取り巻く環境の激変。しかし、社会は被災者に対して、あまりに早い適応を求めすぎています。

事故の被害が大きかったベラルーシの保養所では大人も子どもも、ヨガ、アロマセラピーに加え、栄養をたっぷりとする療法などが積極的に導入されています。

「保養」というのは心身のリハビリなのです。このような保養の意義を被災された方々に知っていただきたいと思っています。小さなパンフレットを発行して、お伝えしていきたいと考えています。

社会貢献者表彰からいただいたエネルギーをチェルノブイリにも東日本にも、お届けしたいと想います。

特定非営利活動法人 チェルノブイリへのかけはし
代表 野呂 美加



▲ 廃校を利用 廊下で走っても怒られない (留寿都村保養)



▲ 奈良県でチャリティー講演会



▲ みんなで植樹 (北海道当別町) 2002年

▼ ボート遊び (北海道網走湖) 2011年夏



▲ 夏祭りに参加 (北海道斜里町) 1997年



▲ とうきび畑でとうきびもいできます (留寿都村保養)

井上 勝江



東京都

1949年に設立された関東医療少年院で、院内の20人位の少女たちに染色を教えていた。同院では棟方志功氏の弟子でもあった木版家の棟方末華氏が木版の指導をしていたが、末華氏から木版画を教えもらいながら染色の指導を20年間続けた。その後同院の建替えや自身の結婚、子育てで指導は止め、末華氏も亡くなった。1995年頃、再び同院から請われ、少年たちに木版画の指導を再開した。同院には病気がちの子や心の病のある子が多い。少年たちが一つのこと集中してやることは有意義であり、一年がかりで作品を仕上げ、カレンダーに仕立てられ販売される。「誰のためでもなく、子どもたちと共に手仕事を通じ、何か見つけてくれることを望み、やっているだけ」と40年近くにわたりボランティア活動をしている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

私が20才前半（60年前）に関東医療少年院に歌声運動をしていらっしゃったある作曲家の先生に同院に連れて行って頂きました。その頃私は江戸友禅の勉強をしていたのです。

少年院の小川太郎院長から女子院生に染色をおしえてほしいとのお話がありました。ほとんど年齢差のない少女たちと友達のようになり染色教室をはじめたのです。テーブルセンターなどを染め作品作りに精を出す女子院生と色々な会話がありました。私は時間のゆるす限り院に通いました。

大勢の後援して下さる方にお買い上げいただきましたが、その後の院の改築や私の子育てなどでしばらくお休みをいただきました。

その当時、院に男子院生に木版画を指導にきていらっしゃった先生に、私も木版を教えていただき、私の木版への道がひらけたのです。20年前に木版の先生がお亡くなりになり、後釜にとのお話があり再び院に指導に伺うことになりました。

私より背の高い男の子の院生との出会いです。院生のおばあさんです。

5月の末に矯正局のバザーがあり、毎年カレンダーは完売をするという人気商品になっております。一年を通して「手彫り」「手摺り」のカレンダーで、仕立ても自分たちで完成させる、手作りのぬくもりのあるカレンダーです。先生方の手助けがあり、少年たちは時間を忘れて没頭します。手仕事による暖かみの創作の喜びを通して、少しでも心豊かな大人になってほしいと願い、祈ります。

棟方志功先生、棟方末華先生と出会い、またたくさんの院生たちと出会いがあり「大悲大慈」の願いに導かれ私は院生とゆっくり歩き指導を続けたいと思っております。

ありがとうございました。



▶ 作品の前で



▲ 関東医療少年院の前にて

公益社団法人 家庭養護促進協会



兵庫県

里親探しを専門とする民間の児童福祉団体で、神戸と大阪に事務所があり、1960年に活動を開始した（大阪は64年から）。様々な事情で社会的養護を必要とする子どもを新聞やラジオで紹介する「愛の手運動」を同62年から神戸で、同64年から大阪で開始し、現在までに2,300人を超える子どもが同運動を通じて里親や養親の元で育っている。新聞やラジオと言ったメディアとタイアップして里親探しを行なっている団体は全国でも唯一で、神戸新聞紙面における「あなたの愛の手を」の連載は今年9月16日で2,156回を数えた。

理事長
芝野 松次郎

◇推薦者：神戸新聞社 文化生活部長 西海 恵都子

昭和37年から神戸新聞の紙面とラジオ関西の番組で毎週1回里親の必要な子どもを紹介し、その子どもたちの里親を求める愛の手運動をつづけて51年。これまでに里親に迎えられた子どもたちは2,320人になります。マスメディアとタイアップした里親探しの民間活動はわが国では他に例がなく、ユニークで先導的な活動として注目されてきました。

欧米の多くの国々では、親と暮らせない子どもたちの半数以上が里親やグループホームで暮らしていますが、日本では90%弱が乳児院や児童養護施設で、10%余りが里親やファミリーホームで暮らしているに過ぎません。「何とか多くの子どもたちが地域の普通の家庭で暮らすようにしたい」と、里親探しの活動を神戸で始めたのです。

昭和39年からは大阪にも事務所を設け、毎日新聞の協力で同じ愛の手運動を始めました。それから半世紀が過ぎ、国もようやく子どもが家庭で育つために里親制度の充実を促進するようになり、制度の改革などの振興策を打ち出しています。

当協会が活動をはじめて50年が経ち、里親や養親に育てられた子どもたちの多くは親となり、家族を持ち、それぞれの人生を歩んでいます。

協会が以前実施した大人になった里子や養子達への追跡調査の結果では97%の人たちが「この親に育てられてよかった」と回答しています。

どの子どもたちも本来は家庭で暮らしたいと思っているし、大人に大切にされ、信頼されて育ったと感じる子どもたちは他人への信頼や思いやりの気持ちを持つようになっていきます。

「里親への理解が最大の支援です。里親は立派な人、偉い人、という見方をする人たちは傍観者に過ぎず、一緒に子ども達のことを考えましょう、という仲間を里親は求めています」とある里親は語っています。

今回の受賞を大きな励みとし、これからもより一層里親制度への理解を広げ、一人でも多くの子どもたちが里親との出会いができるよう、工夫と努力を続けて行きたいと思います。

公益社団法人 家庭養護促進協会
理事長 芝野 松次郎



▲新春初笑い大会



▲キャンプファイヤーを囲んでのゲーム



▲里親サロンのクリスマス会



▲里親制度をすすめるための講演とシンポジウム



▲真実告知会（里親のための研修会）

ホーチミン市ストリートチルドレン友の会



代表
チャン・ヴァン・ソイ



代表
吉井 美知子

三重県

ベトナム人新聞記者であったチャン・ヴァン・ソイ氏がホーチミン市中心街にストリートチルドレンが多くいることを目にし、子どもたちが教育を受けられるようにしてあげたいと思い、1984年に無料授業が受けられる施設を設立。学校運営と子どもたちの生活の場の提供、能力開発、レクリエーション活動、職業訓練、奨学金・里親制度、子どもや家族の健康管理や社会心理面でのケア、ソーシャルワーカーの研修を行うようになった。現在7カ所の「能力開発センター」を運営し、約1,300名の子どもたちのケアをしている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

1993年、民間企業の駐在員としてホーチミン市に住み始めた私は、友人からストリートチルドレン施設を運営するベトナム人男性を紹介された。寄付を始めたのがきっかけで定期的に会うようになり、最後には結婚してしまう。ほそぼそと2ヶ所の施設で40人ばかりの子どもたちのケアをしていたのが、ドイモイの本格化とともに資金が増えNGOを自称する団体を設立、現在では子ども1,200人を擁するローカルNGOになったのが「ストリートチルドレン友の会」(FFSC)である。

NGOの運営には、子どものケア方法など活動内容そのものに関する事、活動のための資金調達、人員の確保など、さまざまな頭の痛い問題がつきまとう。これらは日本であれベトナムであれ、市民団体にとって共通の課題であろう。しかしベトナムでは、そして特にFFSCにおいては、政治的安全性の確保という大変な問題につきまわられての歴史であったし、それは現在も続いている。

FFSC創始者のチャン・ヴァン・ソイ(Tran Van Soi)は、共産党員ではないベトナムの一市民である。過去の履歴で人を色分けする習慣のある社会主義国ベトナムで、カトリック教徒であり家族が大勢アメリカに移住しているという立場で、NGO活動はいくら純粋に子どもたちのための活動であってもなかなか認められない。それどころか、NGOが開講する子どもたちの無料授業にはしばしば当局から停止命令が出され、施設には閉鎖命令が出される。過去には施設を国に乗っ取られて、寄宿していた子どもたちを街路に戻さざるを得なかったこともあるし、団体自体の閉鎖命令が出たこともある。そのたびに場所を変えて再開したり、取りなしに走り回ったり・・・

そんななかで団体を設立してから20年もの間、活動を継続することができた。創始者やスタッフの努力のおかげもあるし、共産党員のなかでも実績を認めて個人的に応援してくれた人たちのおかげでもある。そして多くの、貴重な、本当に貴重な日本人を始めとする外国の支援者の方々のおかげである。

このたびFFSCは社会貢献支援財団より社会貢献賞を頂いた。今までベトナムの政府や公的機関から、活動抑制につながるお達しを受けたことはあっても、あまりお褒めに預かった経験はない。FFSCが社会に送り込むことができた子どもたちに代わり、また社会問題の解決にわずかでも貢献してもらったはずの地元政府に代わり、日本の団体が代理でご褒美を下さったのだという理解で、ありがたく頂戴した。と同時に、忙しいなか受賞式に駆けつけてくださった支援者の皆さん、駆けつけられなくても受賞を知って我がことのように喜んで祝福してくださった皆さんに、団体スタッフと子どもたちに代わり、心よりお礼申し上げます。

2013年12月
吉井 美知子



教育を受けられるようになった子どもたち



「北九州再発見」 ミャンマー学校支援



代表
民谷 喜美子

福岡県

代表者の民谷喜美子さんが20才位の時に門司にある日本で唯一のパゴダ(ミャンマー寺院)を訪れ、北九州市とビルマ(現ミャンマー)の歴史と僧侶の出会いがきっかけとなり、20年後再び訪れた後から僧侶や留学生らと交流を深めていくうちに、同国の貧困な村は古い校舎の建て替えを望んでいることから学習環境を整えようと2001年に会を発足させた。自然に支援の輪が広がりフリーマーケットや屋台の収益金などを募金、そして北九州市民を通じて県外からも共感された多くの善意の募金などを元に2002年には既存の古い小学校2校が建て替えられ、2003年3校以降は政治的背景などから8年間は困難期もあり、2011年4校、2012年5校の小学校の建て直しを行い、760人以上の子供たちが安心して学べる環境を整えた。また今年2013年には6校240人の中学校が建て直される。4校を機に活動に区切りをつけるつもりだったが、ミャンマー側の貧困な村の永年の思いと、北九州市民の暖かな多くの賛同者の後押しから「ミャンマー学校支援の会」は「北九州再発見」ミャンマー学校支援として活動が継続されている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

昨年平成23年(2013)7月31日の面談後の内定通知は、誠に驚きと感動でした。今回の表彰受賞の同伴者、長女浩美は二男がまだ小学校1年生の甘えん坊なので出席できませんでしたが、第4校目「シピンタ小学校」開校式同行者の白井啓子氏が同伴者となり、11月24日(日)休暇(老人ホーム介護士)をいただき、新幹線のぞみグリーン席にて東京に到着、「帝国ホテル東京」チェックインまでの時間、ホテル近辺の日比谷公園、桜田門、二重橋などを白井啓子さんの妹漆原末子さん御案内で二男将士と4人で巡り、島倉千代子の歌、「久しぶりに手を引いて親子で歩いた嬉しさに・・・」と口ずさみ、記念写真など楽しみました。

「帝国ホテル東京」での功績紹介・式典の説明には、長男孝則出張のため欠席でしたが、他に協力者カインワークさん、10年ぶりの元留学生キンエイエイさん(現在日本名橋ユキホ)、友人のモーサングルイさん6人が出席され、夕食会ではミャンマーの方たちと同席など、楽しい時間となりました。

翌11月25日(月)、「平成25年社会貢献者表彰受賞式」が同ホテル「孔雀の間」にて、約700名の参列者によって執り行われました。仕事の合間に出席する長男孝則と二男たちとの同席が心配されましたが、式典が始まり表彰者がステージから下り、参列者と向き合った時、最後列の私の目に表彰者同士の間から2人が見つけている姿が映像のように目に留まりました。お互い13年以上東京に滞在しながらの出

会いです。私の2度の離婚という境遇に3人の子供はそれぞれ自立し自慢ですが兄弟の出会いが念願でした。また初めての表彰で賜りました表彰金は、第6校目「MWE中学校」建替金の一部となり新年には完成。

表彰式では日下公人会長、内館牧子氏のお言葉や表彰者方に感銘を受け、安倍首相昭恵令夫人や日下公人会長、表彰選考委員の方々にお会いでき、色んな願いが叶い、「平成25年社会貢献者表彰受賞」の一流のおもてなしは大変光栄であり、生涯忘れることのできない喜ばしい貴重な体験となりました。

今回の表彰は、多くの支援者の皆様の後押しがあって、代表として賜った神様からの御褒美と思います。改めて支援者の皆様方に深く感謝致します。公益財団法人「社会貢献支援財団」の皆様誠にありがとうございました。



▲安倍明恵首相夫人を囲んで



▲第3校目 ガッテ小学校



▲ガロンゴン小学校旧校舎



▲第4校目 シピンタ小学校



▲ガロンゴン小学校



▲第6校目 MWE中学校

中田 ケンコ



滋賀県

ブラジル出身で1992年に来日した際、日本企業へ出稼ぎに来たブラジル人労働者の子どもの置かれた境遇に衝撃を受け、一度は帰国するが単身1998年に再来日して、滋賀県の愛荘町に「ブラジル人学校コレジオサンタナ学園」を設立した。0歳から16歳までが通う一環教育を行い、順調に運営を続けていたが、2007年のリーマンショック以降事態が一変し、学校の存続は危ぶまれた。子どもの居場所を失くすまいと、教師の給料を半減したり、支援を呼びかけたり、古紙やダンボールを集め売り、給食の野菜は畑で生徒と育てる等により運営を続け、授業料を払えない子どもも受け入れている。2010年には特定非営利活動法人として認定された。

◇推薦者：愛荘町 町長 村西 俊雄

この度は素晴らしい賞を頂きありがとうございます。また、受賞にあたり多くの素晴らしい受賞者の皆さんに出会えたことをとても幸せに感じています。

今回の受賞は、推薦者である滋賀県愛荘町の村西町長のお蔭でもあります。村西町長は私たちのことをいつも気にかけて下さり、外国人コミュニティの大きな支えとなっています。愛荘町では昨年8月から福祉医療助成制度の対象が広がり、12歳までの子どもたちが無料で医療を受けられるようになり、大変助かっています。良き理解者である村西町長の任期が3月までということで、とても寂しく、残念に思っています。

また、受賞式に参加するため、東京に行き、豪華なホテルにも宿泊できました。ホテルの窓から皇居を見渡したときには日頃の疲れも忘れ、優雅な気分になり夢も大きく膨らみました。

私の夢は、サンタナ学園が各種学校に認定され、すべての子どもたちの教育を受ける権利が保証されることです。そのような環境で子どもたちが成長すれば、日本、ブラジルの両方の社会で必要とされる人になれます。また、各種学校になれば、子どもたちの授業料も安くなり、より多くの子どもたちが教育を受けることができ、バイリンガルになることも可能です。子どもたちにとって母国語を学ぶことは何より重要なのです。

多くのことを実現されている受賞者の方と比較すれば、私の功績は小さなものですが、一人のブラジル人女性として権利や福祉、特に子どもの権利のために戦い、母国を代表することができたことを誇りに思います。

このような表彰の機会を設けていただいた財団の皆様、村西町長、そして神様に感謝します。ただ、唯一残念なことは、70人の子どもたちと他の先生方が授賞式に参加できなかったことです。授賞式の間、私がどんなに幸せで、そして私にとって子どもたちがどれだけ大切な存在であるかを伝えたかったです。子どもたちがいなければ、今回の受賞も賞金もなかったでしょう。賞金で送迎用のマイクロバスの修理代を支払うことができました。ブラジルの子どもたちが勉強できるようにと、いつも私を励ましてくださる神様に感謝します。

この機会に皆様をお願いしたいことがあります。それは各種学校になる夢が実現できるように、力を貸していただきたいのです。現在、サンタナ学園には、他の学校で対応が困難であった自閉症の子ども6人、日本の中学校に馴染めず問題を抱えている生徒7人が転校してきました。ガソリン、食料等、経費の全てをクレジットカードでなんとか支払いをしている状況で、転校してきた生徒や特別児童のための教師を雇用する余裕がないのが現状です。また、授業料が払えず、空きを待っている中学生もいます。学校という居場所を与えてあげなければ、子どもは非行に走ります。居場所のない子どもの中には、逮捕された子どももおり、自分が助けられなかったことを後悔するばかりです。居場所を与え、勉強する機会を与えてやれば、子どもはのちに日本社会でもブラジル社会でも必要とされる人材になります。

皆様には偉大な力があると思います。私たちのことを忘れないでください。ブラジル人だけでなく、ペルー、フィリピン、日本で暮らす多くの国の子どもたちが助けを必要としています。皆様の理解や支えがなければ私たちが活動を続けていくことも難しくなります。

私たちもブラジル人や外国人の子どもたちが将来、社会や世界に貢献し、相手のことを考えて行動できる人になれるように願い、今後も努力を続けていきます。

残念ながら日本語の読み書きができないので、日本語で感謝の言葉を綴ることができませんが、今回の受賞の喜びは言葉で表現するのが難しいほど、大きな喜びでした。授賞式では、大きなスクリーンに自動車教習学校を経営する方や、海亀や自然を保護される方の活動が映し出され、社会や人のために尽力されている皆さんの活動に学ばせていただきました。ブラジルには、「長生きすれば、学ぶことは多い」ということわざがあるのですが、この体験はまさにそのことであると思いました。

夫の立会いのもとで表彰していただき、同行して下さった役場の方にも感謝しております。休養と喜びの2日間でした。本当にありがとうございました。皆様に神様の祝福がいつまでもありますように。



▲(授業風景) 日本語教室



▲ 支援物資を運ぶ校長



▲ 授業風景



▲ 夏祭りではサンバを披露



▲(休み時間) サンタナ学園



▲ 地元保育園との交流会

アナコット カンボジア



代表
田中 千草

カンボジア

代表者の田中千草さんはカンボジア国内で一番のマンモス公立小学校、ワット・ポー小学校で教師として赴任し、校長の顧問という立場で教員の意識改革を行い、その質の高さから評判を呼び同校はカンボジアいちのマンモス校となった。音楽の授業(情操教育)が行なわれていなかったカンボジアで、独自で音楽教科書、カリキュラムを作り、教えている。音楽隊が結成され、来賓訪問の際は演奏することもある。また、田中さんは極度の貧困など家庭に事情のある7歳から16歳までの男女6人を引き取り、生活を共にしている。学校から報酬は受け取っていないため、帰国した際の講演料や預金などで子どもたちとの生活を賄ない、7年にわたり活動を続けている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

この度は、長い歴史と伝統、格式のある社会貢献賞を受賞させて頂き、心から厚く御礼申し上げます。審査の際には遠くカンボジアの地にまでお越し頂き、申し訳ない思いで一杯でしたが、皆様の温かい思いを頂きました今回のこの受賞は、現地のみならず共に頂いたものと受け止め、さらに活動に邁進して参りたいと存じます。

私は2007年1月よりカンボジア王国シェムリアップ市で教育活動をしています。当初は青年海外協力隊として赴任しましたが、任期の2年が終わる頃、現地の大家の方から「ここに残ってほしい」という署名を頂きました。一緒に教育を良くしていきたいというみんなの思いがとても嬉しく、また2年ではどうすることもできない状況を何とかしたいという考えもあったため、2009年4月、個人としてカンボジアに戻ることを決心しました。

『アナコット』というのはクメール語で『未来』を意味します。自分たちの未来を自分たちの手で作りあげていく力をつけてほしいという願いを込めました。カンボジアの子どもたちはまだまだ過酷な環境にありますが、毎日を生きるために真剣に生き、輝く瞳と最高の笑顔を持っています。そんな子どもたちから、私の方がたくさんのことを学ばせてもらう日々です。しかし、子どもたちが未来に夢と希望をもって歩いていくには、『貧困』という問題を越えなくてはいけないことを目の当たりにしました。『物質的な貧困』は勿論ですが、それは、『知識の貧困』『精神的・道徳的な貧困』によるところが大きいと感じています。そして、これらの問題と向き合うには、やはり教育が重要であると考えました。

現在は、現地の先生方と共に教育の改善を図り、日々話し合いを重ねながら教員の資質向上や指導法や教育内容の充実のための研修などを行っています。音楽教育に関しては、ワット・ポー小学校で力を付けた先生たちが地方の学校に出向いて現場の先生方に指導できるようになり、少しずつ州内にも広まりつつあります。また、

一方で学校に通えないような貧困層の子どもたちへの就学支援を行い、家庭環境の改善と、保護者の教育に対する理解を深めるために現地の先生方と一緒に家庭訪問を実施しています。

『アナコットカンボジア』は法人化しておらず、みんなの思いだけで活動しています。私一人の力はとても小さいものではありませんが、一緒に取り組んでくれる現地の仲間と、そして、日本で支えてくださる温かな皆さまの応援によって、少しずつ前に進んでいるところです。これからも、支援する側、される側ではなく、同じ人間として一人ひとりの人との関わりを大切に、現地の人たちと同じ目的を持って、共に歩んでいきたいと思っております。

田中 千草



▲近所の子たちと鍵盤練習中



▲音楽授業



▲全校パレード 校舎増築のために地元の人たちから寄付を集めている



▲音楽授業



▲家族写真



▲音楽隊の指導



▲先生方の音楽学習会

NPO 法人 カンボジアフレンド協会



理事長
菅田 則芳

群馬県

理事長の菅田さんが1998年にカンボジアを訪れ、田舎の学校の様子を見て「何とかしなければ…」と支援を開始した。年間1棟の学校建設を目標に、現在まで12棟を建設している。ハード面だけでなく、住民が参画して学校を大切にしよう、子どもたちに遊具を作らせたり、日本の子どもとの交流も行なうといったソフト面に力を注いでいる。井戸やトイレの建設、奨学支援の里親や留学生の支援、写真展なども行なう。

◇推薦者：NPO 法人 国際地雷処理・地域復興支援の会 (IMCCD)
高山 良二

今回は社会貢献の功績により貴財団より受賞致しました。本当に有難うございました。

約15年前にカンボジアを訪問し、カンボジア王国カンダル州プレイバン村に重点的に、子供たちの教育支援として学校を建設して参りました。

当時のカンボジアは、長い内戦により疲弊し政治、経済が機能せず、子供たちの教育は疎かにされていました。校舎はお寺の庭で露天教室。内戦による砲弾で穴の開いた校舎。バナナの葉で葺いた屋根等、全て劣悪の環境で勉強していました。特に教科書、ノート等は無く、地面に棒で書いて文字を覚えていました。この現状を見て何とかしなければという思いが支援の始まりとなりました。

カンダル州プレイバン村は現在群馬県在住のカンボジア人オク・ビチェイ氏の生まれ故郷です。彼はポル・ポト政権時代に難民としてタイの国境近くのキャンプにいました。しかし縁があり、日本の群馬県大泉町で働くことが出来、遠く離れたカンボジアの生まれ故郷を支援してほしいとの事で、当協会に依頼があり、プレイバン地区の学校を建設することになりました。

今後のカンボジア復興は子供たちの教育が第一です。将来のカンボジアを背負う子供たちを育成していく事を決心致しました。学校を建設するようになると住民との接触が密になり、今度いつ来るのやと言われるようになりました。

古い校舎の解体は住民に任せます。新築の屋根葺は大勢の住民のボランティアです。彼らには人の為にボランティアするという習慣がありませんから、人の為になることの尊さを一から教えなければなりません。子供の教育だけでなく、地元の住民の教育も必要でした。

いざ学校を建設し、落成式を行うと次の校舎の建設依頼書を村長、郡長、県長が私達に持ってきます。ですから毎年校舎を建設している状態でした。校舎の他にトイ

レ、井戸、溜池、植林等の要求があり、その都度応じてきました。

しかし、彼らにはゴミを拾う文化がありません。せっかく新しい校舎を建てても再訪問した際、校庭のゴミの散乱がとても気になりました。要求を満たすだけでなく、大切に使用する、ゴミを拾う等の条件を付けて教育していきました。毎年訪問する度に校庭のゴミがなくなり、村もきれいになっております。

村には現在水道、電気はなく、自動席のバッテリーで夜2～3時間位テレビを見ているそうです。今後はカンボジアは電力をいかに生産するかが課題となっています。

平成23年は前理事長の坂本侃氏の慰霊塔がプレイバン村の住民により建設寄贈されました。日本の納骨堂にあたるものです。坂本氏は村人に慕われ、その功績によりプレゼントされたものです。お寺の庭の溜池のそばの素晴らしい場所に納骨堂があります。坂本氏曰く「俺が死んだら分骨して納めてくれ」と笑顔で言っておりました。

当協会は現在シェムリアップの日本語学校の支援やタイ国境近くでの地雷処理事業等にも支援を行っております。今後はハード面よりもソフト面に力を入れカンボジア復興のために微力ながら努力して参ります。

今回は貴財団よりの社会貢献者の部受賞に対して心からお礼申し上げます。

NPO 法人 カンボジアフレンド協会
理事長 菅田則芳



▲カンボジアと日本の掛け橋
オク ビチェイ氏



◀お坊さんが土間で子どもたちの勉強を教えています



▲完成した校舎 タークアット小学校



▲古い校舎を解体する作業を手伝う村人たち



▲村人から贈られた坂本前理事長夫妻のプレイバン村のお墓が完成

白田 玲子



ベトナム

ベトナムのハノイを訪問した際に目にした裸足の物売りの少女や物乞い、靴磨きの少年たちに心を痛め、2003年に日本ベトナム友好協会川崎支部の事務局長として同国ダナン市などに放置自転車を贈る活動を開始した（現在も継続されており本年9月には寄贈数10,000台を越える）。その後2008年にベトナムに居を移し、ホイアン市に土地を購入して環境配慮型建築でカフェを開設。学習環境に恵まれない若者を採用し、接客、調理、語学を指導している。学んだ技能で良い職を得ることや後輩の指導出来るようにと、若者の自立を視野においたもの。同市はベトナム戦争により、枯葉剤の後遺症や障害に苦しむ人が他の地域よりも多く、就労困難と低収入を引き起こしている。またカフェでは、NGOリーダーや社会企業家を迎え座談会を開催したり、環境問題に取り組む人々とのネットワークづくりの場ともなっている。

◇推薦者：Mai Dang Hieu

この度は表彰者の一隅に加えて頂き、誠にありがとうございました。各界の著名な方々のご臨席のもとに開催されました式典では、大変光栄に思うとともにその重みと責任を感じました。この重責を必ず果たそうと考えております。

プロジェクト立ち上げの動機は路上で出会った裸足の物乞いや靴磨きの子ども達。児童労働の現場に遭遇して何かお手伝いがしたいと考えたのでした。

活動拠点をホイアンの川べりに建つカフェに置きました。活動のテーマは2つ、環境保全と恵まれない環境にいる人たちへの学習支援です。

環境保全活動について：カフェでは空調を使用せず自然エネルギーである水や空気の循環で建物を空冷しています。雑排水は自家浄化槽を経てカフェ内の池に戻し、お客様がその風景を楽しみながら環境保全を学べる仕組みです。また、地域の有機食材を使っただけの日越フュージョンメニューを提供し、コンポストなどエコ生活への提案もしています。

学習機会の提供について：ホイアンはベトナム中部に位置します。中部地域はベトナム戦争の傷あとが今も癒えておらず、自然災害が多発し、経済発展から取り残されがちです。仕来りも多々存在します。

私たちはここで恵まれない環境に育った若い人たち、因習に囚われがちな女性達に雇用、職業訓練、学習の場を提供しています。コアになる人材をと最初に雇用した仕事のできる50代女性も、実は幼い頃に両親を亡くして弟妹の世話のために就学の機会を失い読み書きが不自由でした。恵まれない環境で育つ人たちがこれほど身近にいることに驚きを禁じ得ませんでした。この時のショックが活動のけん引力となっています。

本年はプロジェクトの組織充実を図りました。9月にマネージャーを採用して管

理を一任。10月から恵まれない環境の若い女性への支援を開始。両親を亡くしながら独力で高校を卒業した女性を雇用して職業訓練校に入学させ、同じ職業訓練校に在学中の少数民族の女子学生をパート採用して二人に接客と調理の実地指導を行っています。

2014年度は支援を地域に展開します。地域の職業訓練校と協同して“在学生の更なるスキルアップを図る事業”と“地域の恵まれない若い女性達のための研修事業”を立ち上げます。御財団より頂戴しました副賞はこのプロジェクトに活用させていただきます。

授賞式典では様々な分野で優れた活動をしていらっしゃる受賞者の皆さんとの交感の機会を得ました。過去の受賞者へのご紹介も含め、出会いと学びの場のご提供に感謝します。賞に恥じないよう精進致します。



▲ Ucafe と市内各所の水質検査結果をダナン大学の学生にプレゼン



▲ スタッフに水質検査方法を教授 19Aug2013



▲ 自転車引渡し式典 SonTra 地区へ150台



▲ HoaVang にて



▲ 少数民族 CoTu 人に調理や衛生管理を教授



▲ 日本からの大学生にカフェの環境保全活動について講話

Saetanar



Executive Director
Tin Lay

ミャンマー

2002年よりミャンマーのシャン州で、学校建設を通じた地域開発事業を実施している。校舎の建設のみならず、学校運営を支える教員や教科書から文具、トイレや衛生設備などのソフト面の整備を、地域住民の参加と所得創出の仕組みを取り入れた事業を行っている。建設に住民が参加、協力し、施行管理や労働力の提供で節約した建設費を、その学校のコミュニティ開発に活用する。この資金を使い、住民のアイデアで簡易水力発電や農業、小規模金融等の事業を行い、その収益で運営や地域開発を支えて行く仕組み。この事業に重要なのは村の選定で、住民が主体となって学校建設・運営を実現しようと意思のある村々を選ぶことが鍵となっている。5年間で100校の小学校建設をめざし、2007年に100校目、2012年には200校目が完成、2017年までに300校が完成する予定。

◇推薦者：日本財団

この度は当団体に素晴らしい賞を頂きまして、誠にありがとうございます。これまで様々な苦難もありましたが、共に頑張ってきた現地の協力者や活動パートナーであるミャンマー政府関係機関、自分たちの地域発展のために汗を流してこられた地域住民のおかげでこのような賞を頂けたと思っております。

私共がミャンマーのシャン州で「学校建設を通じた地域開発事業」を開始してもうすぐ12年が経ちます。これまで222校の新校舎とその地域で行う地域開発事業、そして43校の校舎の改修や増築を支援してきました。

私共が活動する地域は都市部と比べてインフラの整備が遅れています。教育施設も例外ではなく、校舎の建設も基本的に地域住民が行わなければなりません。地域住民が竹や木を使った校舎をなんとか作り教育省から小学校（5年生まで）として認定されても、中学校（6年生）以上の施設まで整備するのは容易ではなく、遠方まで通うことが出来ずに学業を断念せざるを得ない子どもたちもいます。

セダナーの学校建設の目的は、地域に教育を根付かせることでその地域が発展・自立することです。そのため、校舎建設も（建設会社に委託するのではなく）村の人たちが中心となり自分たちで施工管理を行いながら事業を進めます。建設時に地域の住民が提供した資材や現金・労働力を資金に、建設終了後にはその地域の特徴を生かした収益事業（地域開発事業）を実施して資金を運用します。地域開発事業の収益は、教員不足を補うために村で雇用した教員の給与や教材の購入、校舎の補修など、主に学校運営のために使われます。

このように自分たちの手で事業を進めていくことで村の人たちには誇りと自信が生まれます。また、頑張っている大人の姿を見て、子どもたちも沢山のことを学んでくれます。

今回の式典関連行事では、素晴らしい構成と職員の皆様のサポートに感服致しました。また、初めて訪れた日本で、素晴らしい文化、高い技術力、品質や安全衛生への管理能力など感じることも出来ました。教育の大切さも改めて実感しています。今後も「セダナー」（日本語で“慈愛”の意）は団体名の通り、思いやりの心で、より多くの子どもたちの教育環境を整備し、ミャンマー農村の発展に繋がるよう活動を続けて参ります。

最後になりましたが、これまで活動資金を助成して下さっている日本財団の皆様、このような貴重な機会を下さった社会貢献支援財団の皆様に感謝とお礼を申し上げます。



▲ U Tin Layと子どもたち_パラウンチャウン準中学校落成式典にて

▼ 事業実施地域の村の風景



▲ 事業実施地域の農村風景



▲ インボーコンユワティ中学校_教室内



▲ 事業対象校選定調査時の地域住民への事業説明風景



▲ バウンビャー小学校_セダナーが建設を支援した校舎



▲ バウンビャー小学校_旧校舎

山本日本語教育センター



代表取締役
山本 宗夫

カンボジア

1996年にカンボジアのシェムリアップで、長い内戦により疲弊した同国の復興に役立てるため、観光に訪れる日本人相手に仕事が出来てカンボジア人の経済的自立が図れるように、同国と日本の友好を深める目的で、代表者の山本さんが私費を投じて設立した日本語教育センター。約60名の学生が学んでおり、卒業生はJHC（カンボジア現地手配専門会社）のツアーガイドやホテルマンになるなど、培った日本語を活かしている。同センターは「山本学校」と呼ばれ親しまれており、現在は山本さんも運営に携っているが、ゆくゆくは現地に運営を任せたいと考えている。

◇推薦者：佐藤 穂貴

この度はこのような立派な賞をいただき誠にありがとうございます。今までこのような立派な賞をいただいたり、他の方から認められたりするようなことがなかったため、この度の受賞を非常に嬉しく感じております。私がやってきたことはみなさん苦勞だとか、大変だとかおっしゃいますが、そんなことを思う気持ちは一切ありません。もしかすると苦しいこともあったかもしれませんが、楽しかったことの方が多かったので忘れていいのかもありませんね。

1996年にカンボジアで日本語学校を開校して今年で18年目となります。今では多くの日本語学校や塾ができていますが、ここまで大規模で組織的、何よりも無料の日本語学校はまだないでしょう。今では500名もの生徒が日本語学校を卒業し、およそ9割以上の卒業生が日本語を使って各方面で頑張ってくれています。観光業でのガイドをはじめ、ホテルや空港の職員、そして、遺跡調査関係の通訳など。サービスや対人関係を重んじる日本人相手の仕事は大変でしょうが、皆一生懸命日本語を勉強し、仕事に生かしてくれています。そのように皆が日本語及び日本人を受け入れようと努力していることが、日本語レベルの向上につながったのではと感じております。そういう点において、日本語学校を開校して一番よかったこと、それはカンボジア全体の日本語教育および日本人相手の観光産業が発展したということでしょう。

さて、私の目指すところ、それはカンボジア人が自らの力で学校の運営を行い、そして人材を育て、教育の力を次の世代にもつなげていくことです。今ではその形はほぼ出来つつあるといえるでしょう。今後どんどん発展していくカンボジアにて、カンボジア人達がより良い日本語教育を受け、素晴らしい人材に育つことを期待しております。

山本日本語教育センター
JHC株式会社 代表取締役 山本 宗夫



▲開校式



▲授業風景



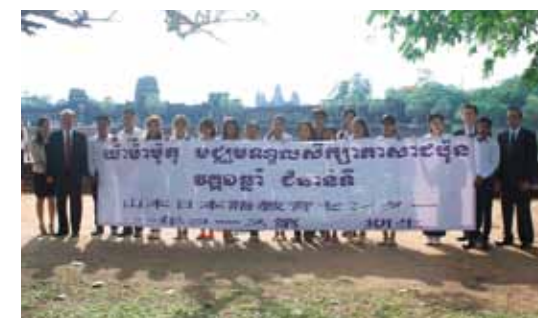
▲書道



▲スピーチコンテスト



▲スピーチコンテスト



▲卒業式

藤田 京子



千葉県

都内で勤務していた昭和 59 年、赴任先の墨田区の中学校に中国引き揚げ者の子どもが入学してきたことから「外国の文化背景を持つ子ども」の日本語教育分野で貢献してきた。藤田さんは職務の枠を超え存在自体が問題を抱える子どもと家族の心の拠り所となり支援を続けている。教職を退いた後、平成 16 年に FSC（外国人生徒学習の会）を発足、ボランティアの協力を得て学習会を行っていたが、これだけでは不足であると、区教育委員会を動かし「すみだ国際学習センター」の設立に尽力。当該の子どもは来日直後から集中的に 200 時間を超える日本語教育を受けられるようになった。また、FSC はセンター内外を問わず当該の子どもの教科学習支援も行う。平成 19 年には「東京の日本語教育を考える会」を結成し、有識者や教育関係者、NPO などと連携しフォーラムや講演などを通じ日本語教育の抱える諸問題を解明し、改善に向け活動している。

◇推薦者：中山 真理子

私が外国から来日した子どもと関わり始めたのは昭和 59 年頃から、勤務校の東京都墨田区の中学校に引揚者の子どもが多数入学してきたことによります。担当教員不在の続く学習室を時折訪ねるうちに子ども達の不安や家族の苦境を知り、理科教員の私が日本語指導から家族の生活支援にも関わるようになりました。私費引揚者の中には住む所や仕事、生活費等の余裕もなく、体調を崩している家族もあり、緊急に事を解決する必要がありました。日本語指導の傍ら、子どもと保護者伴い、身元保証人として家や仕事探し、生活保護申請や病院通い、親権委譲訴訟やいろいろな事件の処理等も当たりました。

その後一般の中国人が増えるにつれて高校受験が大きな問題になりました。日本の生徒と同じ条件で受験しなければならず、日本語の基礎から教科学習まで短期間に習得するために時には私宅で学習合宿などもやりました。

しかし、私の退職と同時に日本語教室は閉鎖され、子ども達の日本語を学ぶ場所も、指導できる教師も不足、さらに多国籍の子どもの増加により学校でも問題が発生し、区民からも日本語学級設置の要望が高まり、私へも支援の声も届けられました。私は区民とともに区教委に日本語学級設置の要望を続けましたが、受け入れる中学校はありませんでした。

平成 16 年 12 月、指導ボランティアを募り、区のボランティアセンターを使用して「外国人生徒学習の会（FSC）」を発足、学習をスタートさせました。さらに受験生の学習の不足を補うために、別途個人宅を借りて対応しましたが、進路へ向けての指導は不十分で、その現状を関係者や新聞、テレビなどマスコミにも訴えました。

このことが功を奏し、区教委から相談を受けることになりました。

平成 19 年、区教委は私の指導方法案を全面的に受け入れ、区教委直轄の「すみだ国際学習センター」をスタートさせました。場所は通学に便利な小学校の空き教室を利用、有資格者 2 人以上を専任指導者とし、来日直後から集中的に早期に初級日本語を習得させ、教科学習への導入を早め、学習面の支援は（FSC）がボランティアとして参加することも了承、又入学者の希望をいれ可能な限り進路に配慮した学年の受け入れも認めました。200 時間を超える集中学習とボランティアとの連携学習は生徒の学習意欲を高め、高校の進学状況も良好になり、区外の行政や国際交流協会、文化庁委託事業等各種講座やフォーラム等から講師として招聴され、紹介に努めました。

その他の活動としては東京都の「国際化市民フォーラム」の実行委員として長年活動していましたが平成 19 年、新たに「東京の日本語教育を考える会」を立ち上げ、代表として都内の有識者、議員、教育者、NPO、ボランティア団体と連携してフォーラムや講演、研究会等を通して東京の日本教育の抱える諸問題を解明し、改善に向けて活動を続けています。

来日した子供達の日本社会へのよりよい共生を目指して取り組んできたことが、この度の受賞へ導かれたことを大きな満足と感謝でいっぱいです。ありがとうございました。



▲ FSC の進級・卒業を祝う会



▲ 水族館の見学



▲ 「外国から来た子ども達と教育」のフォーラム



▲ FSC 学習風景



▲ 成人になった引揚生 | 君家族の来訪

特定非営利活動法人 フリースペースふきのとう



理事長
山北 眞由美

長崎県

不登校の子どもやひきこもりの親、市民、学生などが共同し、不登校の子どもたちやひきこもりの人たちのための相談活動や就労支援などを行っている。理事長自身が不登校、ひきこもりの子どもをもつ親であったことから、共通の悩みを持つ親が集まり、1988年に設立され、2010年に法人格を取得、25年に活動は及ぶ。不登校児の親の会とひきこもり家族の会を毎月1回開催しているほか、不登校児が毎日集うフリースペースを運営、ひきこもりの就労支援も行って、社会復帰への第一歩として、1日だけアルバイトに行くというトレーニングなどを行っている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

この度は、社会貢献者表彰を受賞し、大変嬉しく思います。2013年12月に設立26年を迎えました。これまでの活動に大きな光を当てて認めて頂いたことに、心から感謝申し上げます。

1988年12月24日、曇降る寒い日でした。その日の天候のように、心まで冷え切った辛いスタートでした。

娘が高校1年生の時「クラスの集団いじめ」に遭い、学校に行くことが出来なくなり不登校から転校、そして長いひきこもりに入りました。人を信じることを諦めた娘は、自分に自信を持たず社会との関係を断ちました。暗い室で髪を抜き続ける娘、引き抜いた髪の多さに胸が痛み、生きていてくれさえすれば良いと願った日々でした。そして、もう一度、人を信じる喜びや、自分を愛する心を取り戻してやりたい。今、共感できる仲間が欲しい。そんな強い思いが「ふきのとう」の設立呼びかけになりました。この呼びかけに集った親は3人でした。それから、多くの親たちが集まるようになりました。

親の会「ふきのとう」の中で、やっと自分を語る場が出来た親たち、広い砂漠の中のオアシスのように心を癒す事が出来るようになりました。この26年間、親たちの居場所も何度かの転居に遭いましたが、支援者の協力で居場所の確保が出来ました。その事は、私たちの大きな力となりました。

同じ苦しむ親たちとつながるために相談（電話、面接）活動も活発に始めました。親の会「ふきのとう」に親と一緒に集って来た子どもたちに、次の親の願いは「子どもの居場所」でした。

2004年「フリースペースふきのとう」を開所。

開所記念に始まった「子どもサミット」は、全国から子どもの生の声を聴きたいと参加者が訪れます。

この頃の娘は「フリースペースふきのとう」の事務局長として、又、子どもたちの良き理解者として動き出しました。

活動は、親の会、家族の会、相談活動は前々からの活動ですが、本格的に長崎県北全域を引き受けています。

「フリースペースふきのとう」には、多くの理解者は必要だし、社会に対して知らせていく事の大切さを考え、2010年、NPO法人の認証を受けました。その後、子どもの居場所、親の会を大切にしながら事業に取り組み、ひきこもりの居場所と事務局の開設に繋がりました。

事務局長の娘は先頭に立ち、ひきこもりの青年たちの就労支援、仕事おこし、夢を叶えていく。そんな事に一番燃えています。今、全国の仲間と繋がる喜びを実感し、人を恐れず、人と出会うことが楽しい。やっと、そこに辿り着きました。

最後に社会貢献の受賞は、この活動を一緒に支えてくれた仲間。共に歩いてくれたスタッフ。私たちを、いつも見守り続けてくださった支援者の方、すべての人に贈って頂いた賞なのだと思います。

この賞に恥じないよう地域福祉の核となる活動を広めて参ります。



▲ 第9回子どもサミット～不登校を通して思うこと～



▲ 創立25周年のつとめ 理事長のあいさつ



▲ 「登校拒否・ひきこもり問題」長崎県のつとめ



▲ ひきこもり支援講演会 山本耕平氏（立命館大学教授）



▲ 第5回社会的ひきこもり支援者全国実践交流会 佐世保

小林 普子



東京都

2004年から新宿区大久保で、外国にルーツを持つ児童、生徒にボランティアで日本語教育及び学校の教科学習を行っている。同区は区民の10%が外国人という土地柄であり、日本語の習得の遅れや学習の遅れ、これらの子どもたちに多い、いじめや非行の防止活動にもつながっている。進学を希望する者は皆高校に合格し、これらの受験生の志望校選択の相談から受験手続、合格発表にいたるまでを親や学校、行政に代わって面倒をみている。

◇推薦者：内山 清一

子育て支援ボランティア活動でアドバイスを下さった内山清一氏から「社会貢献者として推薦したい」とのお話を頂き、初めて「社会貢献者表彰」がある事を知った。しかし自分が該当するとは思えずお断りしたが、是非にと推薦をして下さった。

この度、受賞式には晴れがましく面映い気持ちで臨んだが、周りの人々に賞賛を頂きその賞の重みを実感し本当に私で良かったのかと自問した。しかし活動を理解して頂いた事にむしろ感謝しなければと思ひ直す様になった。

子育て支援ボランティアをする中で、新宿区では日本語が十分理解できない母親が子どもの予防接種の情報が得られないと知り、外国人子育て支援ボランティアと考え、日本語ボランティア団体「新宿虹の会」を立ち上げた。2004年に新宿区立大久保小学校を借り、(財)新宿文化国際交流財団と共催で文化庁委嘱事業「親子の日本語教室」を開始した。参加者から日本語ができないため学校でいじめに会っている児童の相談を受け、個人的に日本語と学習支援を始めた。すると同じような環境に置かれている子どもが新宿区の小中学校に多く在籍する事を知った。この状況を打開するために教育長に面会したり、行政に訴えたりしたが中々問題解決には至らなかったが、2008年に新宿区が募集する協働事業に「NPO法人みんなのおうち」で「外国人児童生徒のための日本語と学習教室：こどもクラブ新宿」を事業提案し、採択された。私が中心になりボランティアを集め教室を開始し、現在に至っている。

教室は週5日、夜7時～9時の夜間開催し、学習の場だけではなく居場所ともなっている。今まで教室に通って来た子ども達は200名を超え、今も教室には40名の子ども達が通って来ている。また学習だけではなく進路相談(高校見学、入学手続き、三者面談の同行)や生活相談に応じ、行政のソーシャルワーカーとの連携を取ったりもしている。また最近では教室の卒業生の高校の学習や大学受験の相談、難民の子ども達の学習教室や教育相談も受けている。

一緒にスキーツアーをしたり多文化交流会で多国籍料理を皆で楽しんだり、こ

のボランティア活動は私が支援しているではなく、子どもや多くの人々からエネルギーをもらい支援されていると感じている。

以上の他にも「東京の日本語教育を考える会」等と連携し日本語が不十分な子ども達の教育権保障、ボランティア養成講座、シンポジウム等、子ども達が高等教育に行ける様な活動も行っている。



▲スキーツアー



▲夏の映像合宿新潟県魚沼市みんなのおうち2011年夏



▲大久保教室の様子



▲榎教室の様子



▲教育センター教室



▲年末多文化交流会フィリピンママのダンス

特定非営利活動法人 東京シューレ



理事長
奥地 圭子

東京都

1985年からいじめなどから引きこもりや不登校となってしまった子どものためのフリースクールを都内等で運営している。理事長の長男が不登校となった時の経験から「まずは親の学び合いと支え」が重要であると考え、親の会を作った。親の理解が進むと子どもが元気を取り戻してきたことから、子どもの居場所を作ろうと「東京シューレ」を設立した。ここで子どもは自ら「何をするか、何を学ぶか」などを自分で考え自分で決める。子ども同士で毎週ミーティングを開き、自然にコミュニケーション力や社会性を身につける。卒業した子どもは、学校に戻る、大検を受け進学する、働く、起業するなど様々な道を自分で選択している。活動の最大の目的は「いわゆる学校だけではない、多様な学び、多様な教育があってよく、その選択が不利益にならない社会を目指す」こと。28年に活動は及ぶ。

◇推薦者：白梅学園大学 学長 汐見 稔幸

このたびの社会貢献者表彰、思いがけず、また、長年にわたる活動を認められて大変うれしく、感謝の念でいっぱいです。

受賞当日、さまざまな分野で、社会につくしておられる方々の存在を身近に知り、励まされました。しかも、審査員のお言葉にありましたように、まだまだ知られていない活動がたくさんあることを考えると、私達は、たまたま社会貢献支援財団のお目にとまり、晴れがましい受賞となったけれど、社会を良くしようと日夜奮闘しておられるが、まだ知られていない多数の方々と共に、この賞を受けているという連帯感を感じることができました。受賞までは、自分達の団体が賞を受けて良かった、という視点でしたが、表彰式に出席することにより、社会を支えようとする大きな力を感じ、視野が急激に広がり、未来がより明るく思えました。

また、私達の活動を映像にさせていただき、多くの部門があるだけに製作担当者に御苦勞をおかけしたと思いますが、短い中に活動の真髄がわかる作品であり、御礼申し上げます。

東京シューレは、日本の不登校が増え始めて十年くらいたった1985年、学校外の学び場・居場所が必要だと感じ、不登校の子の親達が集っていた「登校拒否を考える会」の協力を得て、北区に小さな雑居ビルの一室を借り開設しました。学校に行けない、行かない子ども達は、不登校になるまでもいじめその他、辛い思いをし、なってからも不登校を理解してもらえず苦しい経験をし、二重に人権を否定されたような状況におかれますが、居場所がある事により、安心、自信を取り戻し、それぞれが備えている個性を發揮し、自己確立をしていきます。開設以来28年たちますが、通いのフリースクール部門は1,300人の卒業生、ホームシューレといって在宅で育っている子ども・

若者の成長支援部門では、1,800家庭とつながってきました。さらに、18歳以上の若者達で創るシューレ大学部門は130人の学生、7年前に開校した不登校の子ども対象の私立中学校は約300人の卒業生がいます。フリースクールは小・中・高とも在籍する学校の出席日数にカウントされます。また昨年から高校連携により、東京シューレにしながら高卒資格も取れるようにしました。

卒業生達は進学や就労・起業、芸術活動など、それぞれの道を歩んでいます。

受賞を励みに、これからも学校が苦しい子ども達の良きサポーターとして歩いていきたいと思えます。有難うございました。

NPO 法人東京シューレ 奥地圭子



▲平野文科大臣と子ども達がいじめについて会見



▲東京シューレ夏合宿 in 北海道 2012 <食事作りのあとの一息>



▲打楽器講座 (講師:元ブルー・ハーツ梶原徹也さん)



▲地学の授業



▲仕事体験プロジェクト (印刷会社にて)

秋田 稔



岡山県

昭和 53 年から岡山市の児童養護施設岡山市善隣館で散髪奉仕活動を行っている。終戦後、稔さんの父、資夫さんの兄が始めた奉仕活動を昭和 21 年から資夫さんが手伝う様になり、稔さんは大学卒業後、東京の理容室に勤務していたが、岡山に戻り父の店を継ぎ、善隣館での奉仕活動も引き継いだ。親子 2 代で 66 年にわたる奉仕活動。

◇ 推薦者：児童養護施設 岡山善隣館 三宅 嗣朗

日本三名園の一つ後楽園の北西 1km 程の所に、児童養護施設岡山市立善隣館があります。昭和 21 年（終戦の翌年）に戦災孤児の為に岡山市が作りました。一時は 100 名程にもなり、善隣館小学校にもなっていました。初代館長は市内の小学校の校長を歴任されていた西尾三郎氏に任じられました。西尾氏は退官後、私財を投じ善隣館を退所した子供達が独立するまで生活できる大活寮を作り、自らも生活を共にされアフターケアもされた人物です。

伯父秋田忠は、祖父秋田定次郎の理髪店を継ぎ、岡山市田町で私の父秋田資夫と、兄弟で秋田理髪館を営んでいました。西尾館長は店の常連客でした。昭和 21 年のある日、西尾館長が店を訪ねられ「預かっている子供達の髪が伸びて困っている。」とのお話があり、伯父が「散髪に行ってあげましょう」と申し出ました。すぐ児童数が増え伯父独りでは一日では終わらなくなり、父と兄弟で行っていました。その話を聞いた父の親友土屋文男氏（広瀬町）も参加されるようになりました。父も翌年同じ田町に独立し秋田理容室を開業、両店舗の弟子が 10 名以上になり、毎月一回若いスタッフの腕磨きの場にもなりました。

私が理容師美容師の免許を取り、松山商科大学卒業後上京し、戦時中昭和天皇の理髪師をされていた大場栄一先生に師事、中央理容専門学校の高専科・大学科・大学研究科を卒業し、岡山に帰り父の店秋田理容室（コアフル アキタ）を継いだのが 25 歳、昭和 54 年春から弟子と善隣館に行きだして早 35 年が経ち 3,000 名程の散髪をしました。伯父からでは 70 年近くなるので延べで 1 万名を超える散髪をした推計になります、10 年以上の参加者は、伯父の長男秋田哲夫、伯父の弟子日高重光（白石新町サントーク）、日高の弟子岩井健治（福吉町）、私の弟子田中康久（倉敷庄新町）、今も私と一緒に参加している私の弟子濱野弘充（富町 Hair PLAYA）です。濱野は散髪に行って元気を貰って帰ると話しています。

昨今の善隣館は、もちろん戦災孤児はいませんが、何らかの家庭の事情で入館している子供達が 25 名程います。2 ヶ月に 1 回ですが、お洒落な子供はスタイルブッ

クや携帯電話の写真を持って来て注文をします。雑談をしながら和気あいあいとした中でカットします。

善隣館の館長室には石井十次の本が並んでいます。初代西尾館長の志が今の第 14 代館長三宅嗣朗氏まで引き継がれています。一般的な公務員の意識の範疇を超えて子供達を護っています。子供達の笑顔とそれが有ったから 70 年近く私達の散髪が続いているのだと思います。私達はボランティアとか理髪奉仕とかの意識ではなく、家族の散髪に行っているといった意識なのです。私達はほんの少しそのお手伝いをしています。今回の受賞を子供達が喜んでくれ、私達の喜びが倍増しました。ありがとうございます。



▲ 2013 年還暦 伯父、父、従兄の後を継ぎ 35 年の活動になる



▲ 1969 年伯父の秋田忠氏と弟子たち



▲ 西尾三郎 & 大活寮



▲ 1981 年 20 代 子供の散髪が得意になる



▲ 1996 年 40 代 月一回の参加で弟子たちも子供達の散髪が得意になる